

赤い手のグッピー (1944)

GOUPI-MAINS ROUGES

メディア 映画
ジャンル ドラマ
製作国 フランス
色彩 B&W
時間 104分
初公開日 1992/04/11
公開情報 シネセゾン

【解説】

ロベール・ブレッソン、ジャン＝ピエール・メルヴィルなどと共にヌーヴェル・ヴァーグの開祖とも言えるJ・ベッケルの長篇第二作。第二次大戦のドイツ占領下に製作された、舞台となる農村の人々のごく自然な描写に微笑を誘われるサスペンス篇だ。

パリから600km離れたシャラント村のグッピー家は大家族で、財産を外部に渡さないため血縁結婚をし、一族同士があだ名で呼び合う習慣があった。赤い手とは一家のはぐれ者、エドワールの通称。彼はパリで成功し帰郷した甥のムッシューを迎えに出、さっそく仲間のトンカンと共にからかう。ムッシューはトンカンが慕う娘ミュゲの結婚相手として呼び戻されたのだ。ムッシューは迷った挙句とび込んだ家で死体を見つけて逃げ出す。が、それは酔って昏倒した祖父エンペラーだった。ところが、そこに落としたクシから彼は原因不明で急死した義母チザンの殺害を疑われる。祖父の件を恐れ、一旦、家を訪れたのを隠し、初めて来た素振りを見せたからいけなかった。父で当主のメスーは、この二十五年ぶりに再会した我が子（先妻が連れて離婚していた）を物置に監禁。が、その世話を焼くうち婚約者ミュゼと彼はおのずとできてしまい、となれば気懸かりはチザンの死因だが……。

十年に渡りジャン・ルノワールの助監督を務めたベッケルならではの、巧緻さと大らかさが背中合わせする家庭劇で、その複雑な人物の出入りと適切な処理は、どこか師の「ゲームの規則」を彷彿とさせる。

【クレジット】

監督	ジャック・ベッケル	Jacques Becker
製作	ジャン・ミュゲリ	
原作	ピエール・ヴェリ	Pierre Very
脚本	ピエール・ヴェリ	Pierre Very
撮影	ピエール・モンタゼル	Pierre Montazel
音楽	ジャン・アルファロ	Jean Alfaro
出演	フェルナン・ルドー	Fernand Ledoux
	ロベール・ル・ヴィギャン	Robert Le Vigan
	ブランシェット・ブリュノフ	Blanchette Brunoy
	リーヌ・ノロ	Line Noro